

日帝の植民地支配と全南羅州地域の地方有力者

河 元 鎬

序論

韓国は日帝の植民地権力が強い植民地近代を受容して近代社会へと移行していった。植民地支配権力によって強要された植民地近代の裏面には、伝統的な要素が依然として水面下で働いていた。日帝の植民地権力は郷土社会のヘゲモニーを掌握しようとしたが、専一的な支配は不可能であった。地域社会は中央とは違い、相対的に排他性や閉鎖性を持つ空間であったため、植民地近代のヘゲモニーがそのまま貫徹されにくかった。三・一運動を経て、1920年代以後、郷土の支配エリートを植民地権力と地域民の媒介者にしたてあげる政策に変更されたのもこのためであった。

農村エリートは植民地権力の意志を伝達するものであり、かつ同時に民族意識を保つことが可能であるという両面性を持っていたと評価される¹。ところが、この両面性の裏には地域社会における政治的ヘゲモニーがあった。現実の権力者である植民地政府は否定できなかったが、自らの社会のおよび経済的基盤である地域民からも絶対に乖離できない歴史的な条件が背景にあった。農村エリートである「地方有力者」は必ずしも植民地権力が創り出したわけではなかった。ほとんどの場合、伝統社会において社会・経済的に支配的な位置にいた集団が、植民地権力との妥協や拮抗といった二重性を示しながら、植民地支配の下で支配エリートとして登場したのである。これに関する研究は、収奪と抵抗といった単純な二分法を乗り越え、植民地近代の内面を照射し得る重要な糸口を示すことができるだろう。

とりわけ本研究では、全羅南道の羅州地域の事例を通して、日帝の植民地支配期における地方有力者の存在形態を明らかにし、植民地近代の内面に横たわる伝統的な要素と農村エリートの対応を探ることとする。

この点を解明するにあたり、全羅南道の羅州地域は極めてふさわしい条件を備えている。①羅州地域は韓国の代表的な平野地帯で班村が散在し、郷吏たちの勢力が強かったということもあり、伝統的な要素を豊富に持つ地域である。②開港後、開港場となった木浦の背後農業地帯にあたり、栄山浦などの浦口は物産の集散機能を備え、民乱や東学農民戦争、義兵抗争などとの関連からも注目すべき動きを見せた地域である。③「合邦」の前後に日本人の移住が盛んになると、湖南線の開通（1914年）、道路の建設、市街地および市場の

1 松本武祝「研究史の整理と課題提示」『朝鮮農村社会の〈植民地近代〉経験』（社会評論社、2005年）参照。

造成など、いわゆる「開発ブーム」が起こり、それに便乗して急激な変動過程を経た。とりわけ、栄山浦一帯は1930年代初めの栄山江河川改修工事以後、本格的に開発された。④また、日帝時期、この地域ではブルジョア民族運動や農民運動が極めて活発に展開されていた。このように羅州地域は、伝統的な農村社会が近代的・植民地的な再編過程を経たことを圧縮的に示している場所である²。

本稿は羅州地域の有力者の存在を明らかにするため、郷吏勢力に焦点をあわせる。実際に羅州地域は他地域とは異なり、郷吏勢力が著しく強く、植民地支配下においても彼らが主要な有力者集団であった。

1 羅州の社会経済的条件

全羅道の西南部に位置する羅州は、東は光州・和順、西は咸平、南は靈巖・務安、北は長城と境界を接している。羅州地域はそのほとんどが低い丘陵地帯で、光州と和順から流れる栄山江の支流が羅州東北地域で合流して郡の中央部を貫いている。このような地理的特性のために水田の比重がかなり高い。1927年においては農地2万7683町歩のうち、水田が67%、畑が33%であった³。

20世紀の羅州平野地帯の農業生産は全羅道の他郡県に比べて極めて良好であった。羅州の土地生産性、労働生産性、農牛保有状況、堤堰数などは道内の他の郡県よりまさっていた⁴。

羅州はまた、農業環境が良好だったというだけでなく、商業も発達した地域である。羅州地域には、韓末まで全羅道で最大規模を誇った南平市（1、6日）をはじめとし、羅州面の羅州市、細支面の東倉市、公山面の南倉市、潘南面の潘南市（4、9日）、多侍面の佳洞市（3、8日）など、さまざまな場市があった⁵。これらの場市以外では、栄山江岸の大小さまざまな渡し場も物産集散の機能を担っていた。そして羅州邑に近い栄山浦は木浦開港（1886年）以後、物産の集散地として発展していった。

このように、羅州地域は優秀な農業生産力や優れた物流網を備えていたため、地主制が非常に発達した。1927年現在、総耕地のうち、自作地が35%、小作地が65%であった。そして農家の内訳は、1927年現在、小作農が56.8%、自小作農37.3%、自作農4.6%、地主が1.3%であった。小作農と自小作農がほとんどを占めていた。このような地主が所有する農地比率および小作農・自小作農の比率は全羅道の平均を上回っていた。1927年現在、全羅道の総耕地のうち、自作地が47.7%、小作地が52.3%であった。そして農家の内訳は、1927年現在、小作農が42.6%、自小作農が37.2%、自作農が18.3%、地主が1.9%であっ

2 羅州地域の近代的社會變動については、河元鎬他『韓末日帝下 羅州地域の社會變動研究』（2008）参照。

3 『全南事情志』。

4 羅州地域の農業生産構造に対しては鄭勝振「19-20세기 전반 農民經營의 變動様相」（『經濟史學』25、2003）参照。

5 『朝鮮の市場經濟』128頁。